小中野中

主体的に学ぶ生徒の育成

～話合い活動や学んだことを表現する場の工夫を通して～（３年計画の１年次）

校長　　佐々木　宏恵

１　研究主題について

本校生徒の実態として、これまで「学習意欲・学力の差の拡大」が課題として挙げられたため、「課題解決に向け、主体的に授業に取り組む生徒の育成」を目指し、身に付けた知識・技能を生かし、協働的に活動する学習を意識し３年間継続的に取り組んできた。教師による導入の働きかけの改善や一人一台端末の有効的活用、生徒個々による授業目標の設定や振り返りの仕方の工夫などを通し、課題解決に向け意欲的に学習に向かう生徒も徐々に増え、積極的な意見交換や生徒同士で教え合う場面も見られるようになった。一方で教科の得意・不得意やコミュニケーション能力の違いにより、一部の生徒のみが積極的に話合い活動に参加し、苦手意識のある生徒はなんとなく話合いに合わせているような場面や、身に付けている知識や技能に個人差があるため、課題解決に至るまで、全員が毎時間主体的に取り組めた訳ではなかった。以上のことから生徒全員が主体的に学習に取り組めるような授業を目指し、研究や研修を重ね、学年、学校全体で対策をたてる必要があると考えた。

そこで今年度は「主体的に学ぶ生徒の育成」を目標とし、話合い活動や学んだことを表現する場面を工夫することで全員が主体的に授業に参加できると考え、取り組むこととした。全校で話合いの基本的な流れやルールを設定し、どのような場面、集団でも話合い活動ができるようにした。「出し合う→比べる→まとめる」を基に、自分の立場を表明し、多種多様な考えに触れながら意見を変容させ、学んだことを生かしながら考え抜くことで、全員が授業に参加できる授業づくりを目指したい。また、授業だけではなく短学活等も利用し、社会のニュースや身近な話題にも目を向けさせ、話合い活動に慣れさせるとともに、視野を広げたり、考えを深めたりする機会を創出したい。生徒の実態を把握し、必要な手立てを講じるべく、さらなる校内研修の充実を図り、研修主題の実現に向けて教師一丸となって取り組みたいと考え、課題を設定した。

２　研究のねらい

課題に対して、生徒に必要感や切実感をもたせる導入を工夫し、見通しをもたせたり、自分の立場を表明してから話合い活動に参加させたりするなど、主体的に課題に取り組ませる。また、立場を再表明する場面を設けることでスモールステップで自分の立場を振り返り、思考の変容を自覚する過程を通して、生徒のさらなる学習意欲の向上に努める。

３　研究仮説

(1)　各教科及び学級活動、総合的な学習の時間において、話合い活動を取り入れ、自分の立場を表明し、意見を出し合い、比べ、考えを再構築することで追究意欲の喚起や集中力の持続につながり、学習意欲の向上が図られる。

(2)　ユニバーサルデザインを意識した板書、ワークシート、端末での振り返りの仕方を工夫することで、学びの過程を生徒自身が理解し、学習内容の定着及び学力の向上が図れる。

4　研究内容

(1)主体的に学習課題に向かわせるための工夫

ア　導入の工夫

①課題に対して自分の目標（見通し）を立たせる。興味や関心・見通し・自分と結び付ける。

②生徒が疑問や必要感、切実感を得られるよう発問や活動の指示、教材の提示等を工夫する。

イ　話合い活動の充実

①話合いのルールの統一「出し合う→比べる→まとめる」。

②立場の再表明など意見の変容を感じられる場面の設定。

(2) 学んだことを表現する場面の工夫

ア　学んだ知識や技術をつなげる力、取捨選択する力の育成。

イ　既習事項や教科横断的な知識を想起できる工夫。　ウ　個人、ペア、グループでの表現の場の工夫。

(3) 評価の工夫と積み重ね（指導に活かす評価・記録に残す評価）

(4) お互いの指導技術を学ぶ機会の設定

(5) 諸検査の結果を生かす授業の工夫

5　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	授業研究　全体会等
4	12	第１回校内研究　研究についての共通理解　、ローテーション道徳（～2 月）
7	6	教育指導課・総合教育センター学校訪問　第４回校内研究：授業研究（要請訪問）道徳　授業者　講師　松森大輝
10	5	三八管内小・中学校道徳教育研究協議会　授業者：市川達弘教諭、一ノ渡正人教諭、小笠原純子教諭

(2) 一般研修

4	19	第２回校内研究　生徒に関する情報交換（生徒指導・健康面など）
5	31	第３回校内研究「指導と指導の一体化」講師:八戸市教育委員会教育指導課副参事　日向端聖指導主事
8	21	第５回校内研究　ｈｙｐｅｒ―ＱＵの結果分析、授業の振り返り（グループ別）
11	29	第６回　小６による授業参観及び中学校の授業体験
1	9	第７回校内研究　特別支援研修　講師：八戸市こども支援センター副所長　小林真由美指導主事 ｈｙｐｅｒ―ＱＵの結果分析、ローテーション道徳振り返り

6　研究の成果

(1)　全職員で道徳科の授業に取り組み、授業参観や研究協議をすることにより、話合い方法や授業の組み立て方についての理解を深め、各教科の授業でその手法を生かすことができた。

(2)　生徒自身による授業の振り返りを活用したり、生徒の実態や個々の理解度に合わせて課題を設定したりすることで、主体的に学習課題に取り組む生徒が増えた。

7　研究の課題

(1)　話合い活動を通して意見を交換し合い、学びを深める場面は増えたが、その内容が定着、向上に結び付いていない部分もある。学んだことがきちんと定着する指導の工夫が必要である。

(2)　学習を苦手とする生徒の学習意欲の向上や学習内容をアウトプットさせる場面の工夫など全員が主体的に授業に参加できるための、さらなる工夫が必要である。

（記入者　土川　真紀子）